

『思い出が詰まった山頂ゴール係』

(富士吉田市陸上競技協会)

富士吉田市陸上競技協会は昭和 43 年に発足し、歴史を重ねること 50 年余り。数多くの陸上競技審判活動や大会運営を通して、富士北麓のスポーツ振興と地元住民の健康推進のために活動をしてきました。

富士登山競走は本協会の初代会長である渡辺万男もレースの発起人の一人で、協会の活動の中でも最重要な大会となっております。このため協会発足の前から会員の一部が運営の手伝いをしていましたが、昭和 45 年に競技運営の中心を担う主管が山梨陸上競技協会から本協会に移管されてからは、スタート誘導、ゴールの決勝審判、コース監察などの部署で本格的に競技運営に取り組むようになりました。

中でもここではたくさんの思い出やエピソードが詰まっている山頂ゴールでの出来事を中心について振り返ってみたいと思います。

山頂ゴール係のメンバーは大会前日の夕方から 8 合目の山小屋を目指して出発するのですが、かつては登山競走の前日、富士吉田市内一周駅伝も行われていて、審判だけでなく駅伝選手として出場した者も 8 合目に向かいました。

山小屋に着いても次の日は山頂まで登らなければならないため、ゆっくり身体を休めなければならないが、なぜか甘酒売りや金剛杖の焼き印押し、また生活用水に使う万年雪の採取などの手伝いをするなど、毎年お世話になっている山小屋で、身内になったような時間を楽しんだりしていました。

そんなのどかな山小屋の思い出とは違い、山頂ゴールの業務は平地のレースにはない厳しい自然との闘いでもありました。空気が薄い中での残雪の雪かき。強風が砂や石が舞い上がる中で、集計プリンターが作動せず、浅間大社の社屋を借りてなんとか危機を乗り切ったこともありました。

富士山火山ならではの出来事としても一つ。それは山頂の審判を終え、かつての下山道砂走り（吉田大沢）を皆で下っていた時に発生しました。静かな風の音を突き破る「ゴーツ」という音が後ろから聞こえたと思った瞬間、1 m ぐらいの大きさの岩がバウンドしながら、皆の頭上を飛んでいきました。全員無事でしたが、まさに九死に一生の出来事でした。

たくさんのエピソードに彩られながら 50 年以上に渡り富士吉田市陸上競技協会は、富士登山競走と共に歩んでまいりましたが、残念ながら 2020 年は世界が一変する未曾有の事態により大会中止が余儀なくされました。

しかし、いつまでもこの閉塞した状況が続くとは思っておりません。富士登山競走の未来と一緒に、私たち富士吉田市陸上競技協会も、ランナーの皆さんと一歩一歩高みを目指してまいります。(ただレース当日は皆さんより、一足先に山頂でフィニッシュテープを持ってお待ちしております!(^^)！)

(令和3年4月15日記)